茨城キリスト教大学紀要第45号　187
社会科学　p.187～197

女子高校生の服装意識から考察する服装学習の方向性

扇澤美千子*・皆川　温実**・川端　博子**

1．はじめに

近年,「食育」の浸透に伴い衣服領域では「服育」も注目されている。「服育」とは,「生きる力」を育むという観点から，国際的にも通じる「服装マナーやセンス」，オンとオフを切り替える「自由と規律」，個と社会の関わりを考える「社会性」などを学び，衣服を通して子どもたちの豊かな心を育む取り組みのことである[1)]。

2009年３月の高等学校学習指導要領の改訂では，衣生活領域において，“高校生がこれから迎える社会生活を念頭におき，社会的慣習への適応などの社会的機能を理解させる”，“社会的慣習に適応し，自己を表現する工夫を考えるとともに，着用目的に応じて健康で快適な被服の選択と着装ができるようにする”が目的に挙げられ，社会的機能としての衣服の役割が，以前と比べ重点化されている。

学習指導要領記載の背景には，若者全般の服装マナーの低さ，着装の乱れなどが要因としてあげられるが，例えば，有吉[2)]は若者の意識が個人主義へと移行しているとらえ，高校生の服装に対しても「同じ高校生だけで自分たちの価値観が共有できればいい。その服装に対して大人がどう感じようが彼らにとっては関係ない」と指摘している。また，前田[1)]は,「現在の子どもたちは“同世代に通じるファッション”として関心事として捕え，外から見ればグループのイメージ的な独自性をつくり，グループ内では同質（没個性）でありたいという内向きの感性を養っているようにも思える」としている。このように，自分らしさを表現するはずの服装が流行を追い求め過ぎることで没個性につながり，規範を崩すファッションの登場など若者の服装の乱れやTPOの意識の低さが問題視されている背景には,自分と考え方の違う他者の視線を排除するという意識が影響していると考えられる。

一方で，服装の着装は個人の自由な意思に任され，服装に対する価値観や着方に対する考えも人それぞれのため，授業で扱うことが難しく，家庭科教育に関する研究の中でも着装の指導や指導の効果を扱った論文は少ない。社会的には流行の氾濫と若者の服装の乱れが指摘される中，家庭科においても着方学習に関して取り扱いの手立てが見つからないまま，今日に至っているように思われる。

そこで，本研究では，高校生が服装に対しどのような意識を持ち行動しているかその特徴を探り，家庭科において，着用目的に応じた健康で快適な被服の選択と着装を実践する能力の育成を目指して，衣服の社会的機能のうち自己を表現する衣服の役割について学習することの意味とその方向性を探ることを目的とする。

---

*茨城キリスト教大学
**埼玉大学

2．方　　法

2－1　調査時期と対象者

本研究は，2009年６月～11月，関東地区の女子高３校より協力を得て，女子631名を対象に質問紙調査を行った。３校は，すべて家庭基礎の採択校である。対象者の内訳は，制服指定のない高校生が160人，制服指定のある高校生が471人で（表１），部活や同好会への所属率は77.3％と高く，アルバイトしている生徒は全体の2.6％で少なかった。

表１　対象者の学年と制服指定

		制服指定	１学年	２学年
A	公立	無	160名	
B	私立	有		234名
C	公立	有	237名	
合計				631名

2－2　調査方法と内容

本調査は，留め置き調査法と集合調査法で行った。調査内容は，①「属性（２項目）」：部活の所属，アルバイトの有無，②「家庭科の印象と学習内容（６項目）」：家庭科の好き嫌い，☆印象に残っている内容，着方に関する学習経験と☆その内容，着方学習への意欲の程度，☆TPOに関する知識，③「被服の購入について（６項目）」：☆小遣い，☆被服費，☆Tシャツにかける最大価格，☆買い物頻度，誰と衣服を買いにいくか，被服費のまかない方，④「おしゃれ意識（16項目）」：コーディネイト意識（11項目），髪型や服装に気をつかいますかと☆その理由，おしゃれをすることは好きですかと☆おしゃれをすることでどのような気分になりますか，流行の取り入れ時期，⑤「自己の受容と自分の衣服への満足度（12項目）：自己受容感（10項目），自分をおしゃれだと思うか，自分の服装が好きかの５つの観点から計42項目の質問を設定し，現代の女子高校生の衣服に関する意識と実態を捉えた。回答方式は，５段階評価：１（あてはまる），２（ややあてはまる），３（どちらでもない），４（ややあてはまらない），５（あてはまらない）とし，その他，設問に応じて自由記述形式（☆印記載）とした。具体的な質問内容は結果の項に記載する。

3．結果と考察

3－1　家庭科の印象と学習内容

家庭科に対する印象と被服教育の実態を探るため，家庭科の好き嫌い，家庭科で印象に残っている内容，着方や服装マナーの学習状況などについて検討した。

生徒は，家庭科を好き（23.4％），やや好き（39.4％）と答え，6割を超える者が肯定的に捉えていた。「家庭科で印象に残っていることは何ですか（自由記述）」の問いには「実習（73.3％）」，「体験（8.5％）」，「講義（18.2％）」となり，実習が多数を占めた。領域でみると，食領域を挙げる回答件数が405件ともっとも多く，次に続く衣領域では106件で，「被服製作」「縫い方」が上位にあげられた。被服実習は，中学での選択領域での扱いと家庭基礎の採択により，調理実習に比べて印象が薄い現状であった。

「中学校では着方や服装マナーについて学習しましたか」には，213名（34.7％）が学習したと回答した。その内容には，色の組み合わせ，場面に応じた服，年齢に応じた服などが記載されていたが，これらは被服の社会的機能のうちの社会的慣習と似合うかどうかの

観点で，自己表現に関するものは含まれていなかった。このように，衣服を着ることの意味・効果に関する学習はほとんど取り上げられていない実態が伺えた。

3－2　被服の購入

高校生の被服の購入実態に関してまとめる。高校生が１ヶ月に使える自由な小遣いは０～50,000円と幅広く，最頻値（212名）は4,000～5,000円，平均は5,370円であった。１ヶ月の被服費に関しても，０～50,000円の範囲にあり，最頻値（119名）は4,000円～5,000円，平均は4,237円であった。被服費としての支出がないの回答は51名あった。Tシャツ１枚にかける最大価格の最頻値（128名）は2,000円で，平均は2,421円であった。被服費が自由なお金から支出されるかどうかは不明だが，自由に使える小遣いと被服費には0.49の相関があることから，全体としては自由に使えるお金を被服費に充てる傾向が推察される。

「誰と衣服を買いに行きますか（複数回答）」については，家族（436名，69.1%）が最も多く，次いで同性の友人（160名，25.4%），自分一人（103名，16.3%）と続いた。被服費の主なまかない方としては，家族等に買ってもらう（453名，71.8%）が多いことからも経済面で家族依存の生徒が多くみられた。「一人で買いに行く（76名）」のみを回答した者は，自由に使える金銭を有し被服費が高く，かつ自分で行動し意思決定する傾向が捉えられる。被服費と一人で買いに行く割合は，学年進行とともに高くなることから，高校生は，経済面のみならず購入時の選択においても自立の途にある時期と考察される。

3－3　服装選択に関する意識の程度

次に，日常生活の中で行われる衣服のコーディネイトや服装選択に関する意識を検討する。「おしゃれをすることは好きですか」の問いには，77%が「好き（302名，48.2%）・やや好き（180名，28.2%）」と答えた。ことから，金銭の使途状況の結果とあわせ，衣服やおしゃれは女子高校生にとって大きな関心ごとである。そこで，「私服をコーディネイトする時にどのようなことを意識しますか」の11項目の設問に対し，１（意識する）～５（意識しない）の５段階で調査した項目ごとの結果の平均値を図１（全体）に示した。「気温・天気（1.60）」「活動内容（1.64）」「活動場所（1.77）」「自分に似合う（1.77）」「会う人（1.86）」の５項目を意識する程度が高かった。これらはいわゆるTPOに合致する内容であり，女子高校生は保健衛生機能とともに社会的機能を考慮して私服をコーディネイトしているとみなされる。「人目を引く・目立つ（3.50）」には，やや否定的であるが，「みんなに受け入れられる（2.74）」「自分を表現できる（3.03）」「流行（3.07）」「学生であること（3.08）」の平均は３前後の中間値である。

さらに「髪型や服装に気をつかいますか」に対しては，そうである（207人，33.1%）・ややそうである（305人，48.8%）となり，8割以上が肯定的に回答した。その理由を集計した結果を図２（全体）にまとめた。「身だしなみだから（171名，29.0%）」「自分が満足するため（150名，25.4%）」が多く，「自分らしさを表現するため（76名，12.9%）」「周りから良く見られたいから（72名，12.2%）」，「変だと思われたくないから（72名，12.2%）」の順となった。服装を整えることは身だしなみとして当然のことと考える生徒が多いものの，服装を通して自己の満足感，自分らしさを表現する意識を抱いていることが分かった。

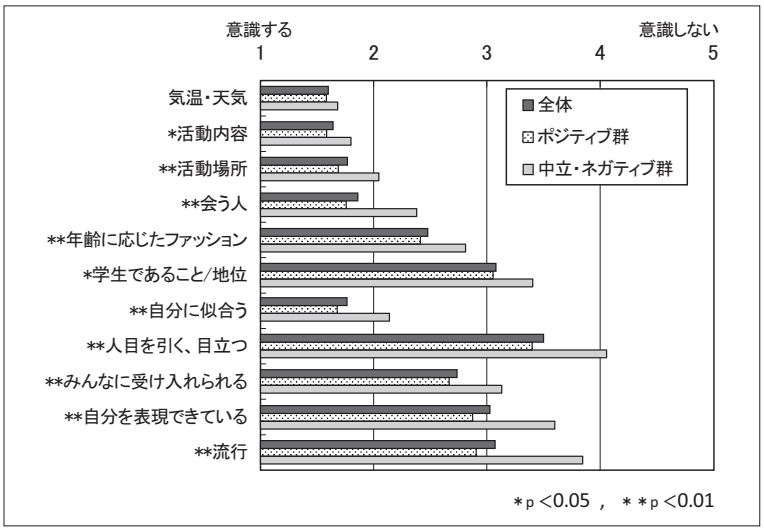

図１　服装選択の意識の平均値

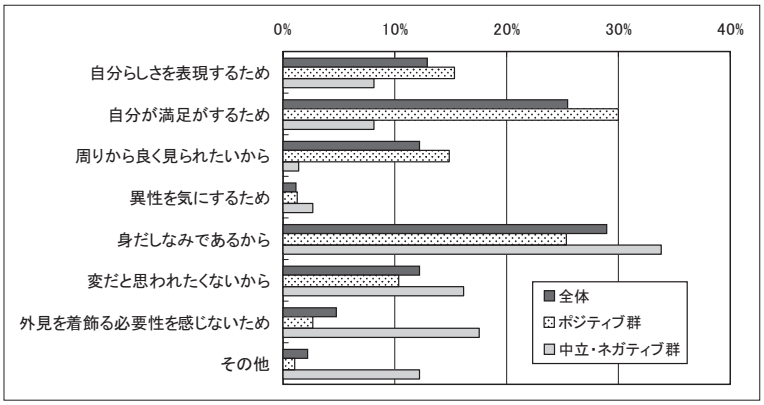

図２　おしゃれの心理的効果と服装・髪型を整える理由

これらのことをふまえ，服装が自己との関わりにおいてどのような影響をもち，どのような役割を果たしているのか考察する。

３－４　服装と心理面のかかわり

服装が心理面にどのような影響を与えているか分析するため，「おしゃれをすることでどのような気分になりますか」の質問に対する自由記述の結果をまとめると，楽しい・嬉しいなど内面へのポシティブな影響【気分の高揚】として366件，自信がもてる，外出したくなる，自分に満足するなど内面へのポシティブな影響【その他】として92件が記載されていた。一方，不安，自信がないなどネガティブな影響については，割合は少ないが28件あげられた。その他，変化なし・興味なしが59件，記載なし86件となった。

以上のことから衣服を着ることは心理面に関ることが示唆されたため，ポジティブな影響を受ける人（ポジティブ群）と，影響を受けない・ネガティブな影響を受ける人（中立・ネガティブ群）でコーディネイト意識について比較した（図１）。ポジティブ群の人は服装選択において意識の程度が高く，「気温」以外の10項目で中立・ネガティブ群とt検定で有意差が認められた。その中でも「自分を表現できる」「流行」「人目を引く」で両者の平均値に顕著な差がみられた。相関係数からも，自分を表現する×人目を引く（ｒ＝0.39），流行×人目を引く（ｒ＝0.36）であることから，自分を表現する上で人目を引くと流行は関連の強い要素とみなされる。

同様に，３－３記載の「髪型や服装に気をつかう理由」について，ポジティブ群と中立・ネガティブ群を比較した。（図２）ここでも，「自分が満足するため」と「自分を表現するため」は，ポジティブ群で高い割合を示し，一方，「身だしなみだから」や「変と思われたくない」は，中立・ネガティブ群で高い傾向がみられた。このように，衣服の心理面の効果をプラスに感じとっている人は，積極的な服装意識を抱き，服装によって自分らしさを創意・工夫する傾向が認められた。

３－５　被服による自己の表現に関る内容

自己表現は，社会的機能の一部として教科書に記載される場合と，それ自身を独立させた機能に記載される場合がみられる。被服による自己表現それ自体を掌握しにくいことも，授業に取り上げにくい理由の一つとなっているのではなかろうか。被服による自己表現は，コーディネイト意識と心理面の肯定度と関連することが明らかとなったが，さらにどのような内容と関るのか考察する。

「自分を表現できる」の回答で，意識する・やや意識する人を肯定群（192名，30.4%），どちらでもないを中立群（234名，37.1%），あまり意識しない･意識しないを否定群（200名，31.7%）とし，肯定群と否定群で比較した結果を示す。まず，衣服の購入とのかかわりでみると，肯定群は被服費（肯定群4,960円　否定群3,717円）とＴシャツにかける最大価格（肯定群2,692円　否定群2,320円）が高い，一人で服を買いに行く（肯定群21.7%　否定群15.2%），買い物頻度が高い（肯定群3.3回　否定群2.7回）傾向であった。コーディネイト意識（図３）からは，「気温」「活動内容」を除く９項目で肯定群の意識が高く，両者に明確な違いがみられた。以上のことから，自己表現は，自立的に衣服を購入・選定する態度と関わり，また，多面的な内容を意識する被服行動とかかわるとみなされる。

また，自己表現には流行への意識も影響することを３－４で述べた。既製服の利用・情報化の浸透によってわれわれは，流行の影響なしに衣服を選択することはできないが，流行をどの段階で取り入れるか[3]は一人ひとりの服装価値観によると考え，流行の取り入れ時期を比較した。図４は，流行の取り入れ時期の割合を自己表現の肯定群別に分析したものである。自己表現に肯定的な人は，より早い段階で流行を取り入れている一方，否定群では流行に対する関心のない人が多い。以上のことから，早い時期での流行の取り入れは，自己表現にかかわりを有する傾向が認められる。

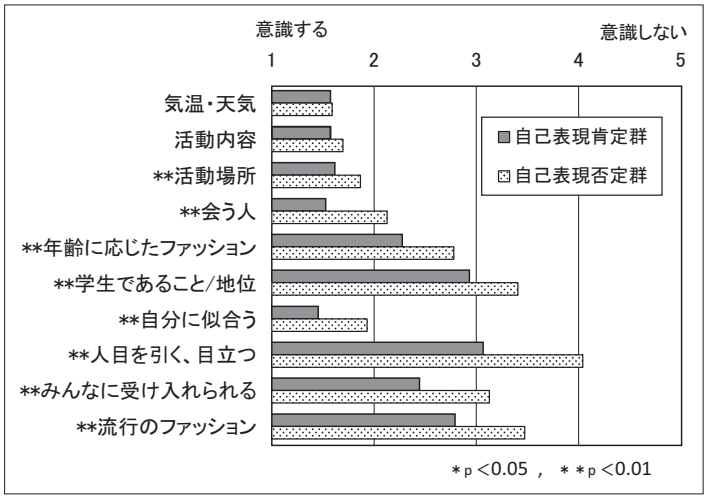

図３　自己表現への意識とコーディネイト意識

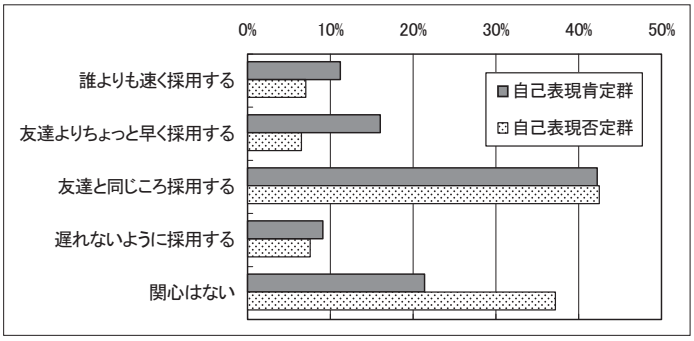

図４　自己表現と流行を取り入れる時期

３－６　自己受容感と着装意識

次に，着装が自己にどのような関わりを持つのか知るために，菅原[4]（著書「人の目に映る自己」）の自己受容感を参考に自己の受容感10項目と，自分の衣服への満足度に関する質問に対し，どれくらいあてはまるか５段階評価で尋ねた結果を図５に示した。

「自分の能力に満足している」「容姿に満足している」「自分のことが好きである」の設問にあてはまる・ややあてはまると答えた者は全体の１割程度で，満足度が低く，自己受容感は全般否定的である。これは自己を批判的に認識する傾向の発達的変化を示した高田[5]の研究において「自分に当てはまるものとして否定的な形容詞が選択された率」が高校生で高い結果と一致している。

さらに，項目間の相関係数（表２）からは，自己への満足や受容の度合いが高い者は，「自分をおしゃれだと思う」「自分の服装が好きである」など自分の服装にも満足する傾向が認められたことから，服装は自己の受容と関わり，ひいては自己肯定感を向上させる要

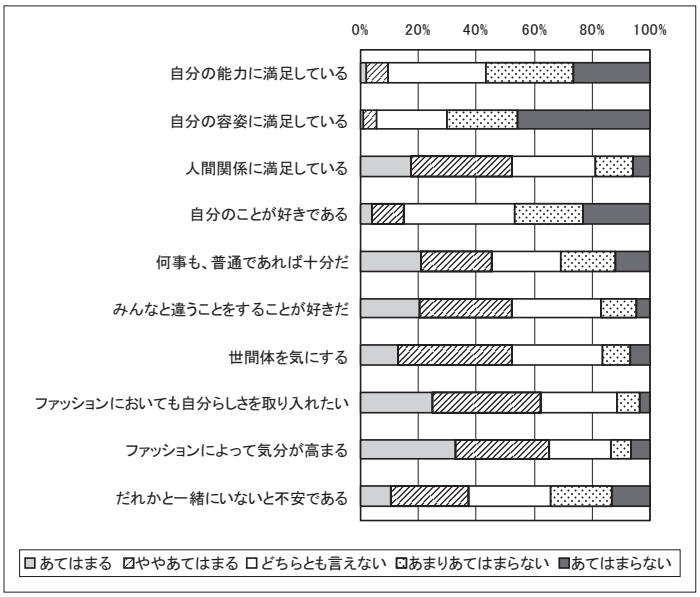

図５　自己の受容感と着装意識

表２　自己受容感と着装意識の相関

		自分をおしゃれだと思うか	自分の服装は好きか	自己の肯定			
				自分の能力に満足	自分の容姿に満足	人間関係に満足	自分のことが好き
自分をおしゃれだと思うか			0.51	0.26	0.30	0.13	0.31
自分の服装は好きか		0.51		0.24	0.30	0.17	0.36
自己の肯定	自分の能力に満足	0.26	0.24		0.61	0.26	0.50
	自分の容姿に満足	0.30	0.30	0.61		0.22	0.53
	人間関係に満足	0.13	0.17	0.26	0.22		0.35
	自分のことが好き	0.31	0.36	0.50	0.53	0.35	

因の１つとなりうると示唆された。これは，土肥[6]が自己概念や自己評価は，被服行動を通じて自らの手で高めることを可能にするとした知見と一致しており，ファッションによって気分が高まる，おしゃれだと評価される等の体験が自分を受け入れ・満足度を高めることにつながることを示す結果といえよう。

そこで，自己受容感の内容を「自分を表現できる」の肯定群・否定群で比較した結果を図６に示した。自己表現の肯定度は自己受容感に関連する傾向がみられる中で，「人間関係に満足している」「世間体を気にする」の２項目，すなわち他者意識の項目では有意差がみられない。服装による自己表現意識の強い人は，他者との関わりにおいては必ずしも肯定的にとらえていないと推察される。自分を表現することは，新規の流行を取り入れることで，目立つ・人と違うなどの効果が現れるが，反面，友人とは異なる・奇異な服装をしているなどマイナス評価を受けることがあるからだろう。

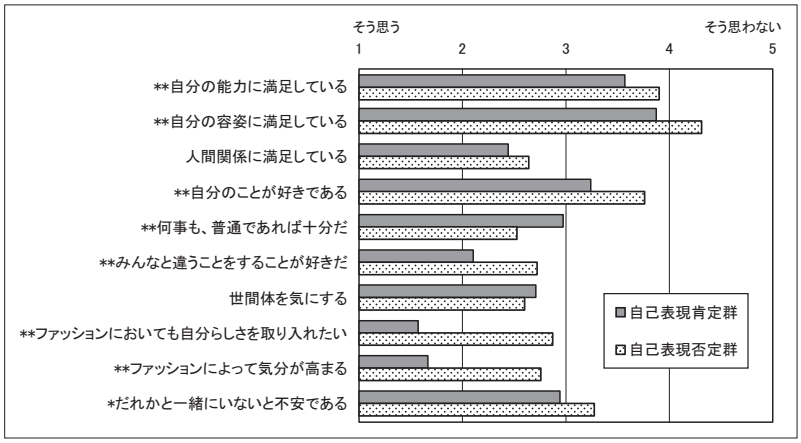

図６　自己表現の肯定度と自己受容感

３－７　着方学習への意欲と教育の方向性

３－１において，中学校で着方や服装マナーを学習した生徒は，全体の１／３であることを記載したが，「TPOについて知っていることを書いてください」の記述内容をもとに，理解度を考察した。理解している生徒（291名，46.1%），どちらともいえない（69名，10.9%），理解していない（158名，25.0%），未記入（113名，17.9%）となり，半数未満の生徒しか理解していない実態がとらえられた。

「着方や服装マナーを学びたいですか」の質問に対しては，学びたい（15.8%）・少し学びたい（36.2%）となり，過半数が学習を希望していた。着方や服装マナーを学びたい人と学びたくない人の違いを探るため，学びたい・少し学びたいと答えた生徒を学習意欲群（319名，52.0%），どちらでもないを中立群（217名，35.4%），学びたくない・あまり学びたくないと回答した生徒を学習意欲なし群（77名，12.6%）にグループ化し，クロス集計を行った。

着方学習への意欲と明確な関連が示されたのは，「制服指定の有無」，「TPOの理解度」，「おしゃれをすることで気分が変わる」，「人間関係に満足している」の項目で制服指定のない生徒の方が，学習意欲群の割合が高かった。これは，自由服校の生徒は男女とも比較的服装に対して関心が高く，機能性を考える服装と周囲に流されない「自分らしい」着装を心がけているように思われるとする土屋・堀内の指摘[7]とも一致する。「学習意欲群」はTPOを理解して，着方の重要性を認識する傾向が確認された。また，おしゃれによってポジティブな影響（気分の高揚）を感じている人ほど学習意欲が高い。おしゃれの楽しさや着装の心理的効果をともに伝えることが，学習意欲を引き出すことに繋がるのではないだろうか。「人間関係に満足していない」傾向は，着方への学習意欲が低い人に高い割合で現れた（図７）。人間関係に満足している人は，自分のことが好きで，コディネート意識では自分に似合う・流行の取入れにも積極的であるが，家族や友人と買いに行き，学習意欲が高く，他者からの目を意識する傾向があると考察される。

以上のように，学習意欲の高い生徒の方が，TPOの重要性を理解し日常生活でも服装に

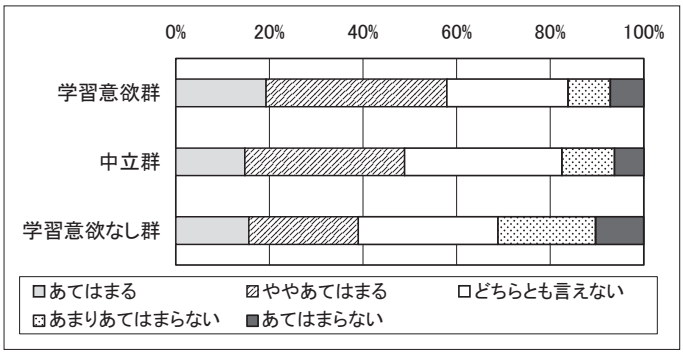

図７　人間関係に満足していると学習意欲

気を遣い，人の目を考慮した服装を意識することで，自己を肯定的に受けとめ，人間関係も良好な状況にあると受けとめている。一方，学習意欲が低い人の特徴として，家庭科自体を好きではなく，服装に対する興味が全般的に低い。彼らに対しては，おしゃれの楽しさや服装の効果を実感させる実習や体験的授業が効果的である。おしゃれやコーディネイトに対する意識，着方や服装マナーに関する知識は，自己受容感を高め，他者からの評価の手段になることに気付かせることも学習意欲を向上させるポイントとして挙げられる。

４．まとめ

本研究では，女子高校生631名を対象に，家庭科での着方に関する学習経験，衣服の購入実態，コーディネイト意識，自己受容度について質問紙調査を行った。女子高生が服装に対してどのような意識を持ち，行動しているかその特徴をふまえ，衣服の社会的機能のうち自己を表現する衣服の役割と着方の工夫に関する学習を進めるための方向性と留意点を探ることを目的とした。

(1) 高校生は，自由に使える金銭の一定割合を被服に費やし，おしゃれや衣服に高い関心を抱く傾向が認められた。私服のコーディネイト時の意識を検討した結果，全体としては，保健衛生機能･社会的機能を考慮して私服を選択しているととらえられ，自己表現，流行，人から目立つといった若者特有のファッション行動については，中立的からやや否定的な意識であった。しかし，自己表現の肯定度は，自立的に被服を購入・選定する態度と関わり，私服のコーディネイトにおいて多面的な内容を意識する被服行動とかかわることが明かとなった。高校生の被服の購入傾向は，経済面・購入選択でも親依存の傾向が強く自立の途にあるが，この時期こそ，彼らの価値観を理解しつつ視野を広げるような教育が求められると考える。

(2) 多くの生徒は，服装によって心理面の高まりを感じ，服装への満足感は自己受容感と関ることが示された。高校生は，自分の能力や容姿，人間関係に対する満足感が低く，自己に対する受容や肯定感が得にくい状況にあることがわかった。さらに，自己への満足や受容と自己肯定感との相関を見ると，自己への満足や受容の度合いが高い者は，自分の服装を肯定する傾向が認められ，服装は自己の受容や肯定感を向上させる要因の１

つとなりうることが示唆された。服装教育では，外見への自信は自己の内面へ自信に結びつくことを実感させるよう行うのが効果的である。

(3) 望ましい服装とは，自分にとっても周囲の人にとっても快いと感じる着装を主体的に組みたてることである。ここでの周囲とは，高校生同士だけでなく，保護者・教師などの大人世代，社会人・大学生など自分たちが近未来にその立場になる人，衣服・ファッションの販売に携わる人たちなど幅広い層の他者である。着装や服装マナーに対する学習意欲が高い生徒は日常生活でも服装に気を遣い，人の目を考慮した服装を意識することで，自己を肯定的に受けとめ，人間関係も良好な状況にある。周囲の目を意識することは服装マナーの重要性に気づき，ひいては良好な人間関係を築くことにつながっていくことも伝えていきたい。一方，学習意欲が低い生徒に対しては，おしゃれの楽しさや服装の効果を実感させるような，例えば，自分に似合う色や服を互いに探しあう活動や衣服の印象効果の体験的学習を組み込む授業などが考えられる。

高校生はおしゃれへの意識，流行のファッションへの興味や関心も高まり始める時期でもあり，高校生の服装価値観を否定し，大人の考えや服装規範を押し付けようとするのはあまり有効な方法ではない。服装教育の中で，場面を意識することの重要性，おしゃれの効果，楽しさ，自己を表現するための要素などを学び，自己を客観的に見つめる機会につながっていくならば“着装”を学ぶことは高校生にとって大きなメリットとなるだろう。

文献

1．前田良治　衣服を通して豊かな心をはぐくむ「服育」とは　日本衣服学会誌　Vol.51　N0.2(2008)　P.85～90
2．有吉直美　人と人をつなぐ衣服の力　日本衣服学会誌　Vol.51　N0.2（2008）　P.91～95
3．例えば，S・B・カイザー著，高木修他訳　流行受容のサイクル　P.197～199　被服と身体装飾の社会心理学　北大路書房（1994）
4．菅原健介「人の目に映る自己『印象管理』の心理学入門」　金子書房（2004）
5．高田利武　「日本人らしさ」の発達社会心理学　ナカニシヤ出版（2004）P.162
6．土肥伊都子　被服と自己の関係とジェンダー　繊維製品消費科学会誌　Vol.42　N0.4（2001）　P.16～21
7．土屋みさと，堀内かおる　制服および着装行動に対する高校生の意識　日本家庭科教育学会誌　Vol.48　N0.2（2005）　P.141～149

Identifying the Direction of Future Studies on Clothing Through Survey on Clothing Consciousness of Female High School Students

Michiko Ougizawa, Atsumi Minagawa, Hiroko Kawabata

Abstract

We conducted a questionnaire survey on 631 female high school students to verify their learning experience on clothing during their homemaking classes, their actual purchase behavior of clothes, their consciousness towards clothing coordination, and their degree of self-acceptance. By verifying the characteristics of consciousness and behavior of the students towards clothing, we aimed to identify the direction and points to consider in our future homemaking classes when dealing with the social function of the clothes, namely the role of the clothes and hints for elaborating it in expressing oneself.

It was verified from the survey that female high school students were: coordinating their daily wears considering clothes not only for physical protection/hygiene function but also for its social function; dissatisfied with their own ability, appearance, & human relationships; and, in a condition in which they could not easily accept or feel positive about themselves. However, students who are positively influenced by their clothing experiences tend to show affirmative awareness and behavior with high level of consciousness in their selection of clothes, and inventive originality in their clothing. Moreover, it was found that self expression of the students through clothing were closely related to their attitude in autonomous selection (purchase) of their clothes and to their clothing behavior with multidimensional awareness, and the level of this positive attitude towards self expression was again closely related to their feeling of self-acceptance.

Therefore, it is desirable that learning experience of the high school students on clothing be aimed at “being able to select and dress in a self expressive way on their own but based on an accurate knowledge of clothing and its manners and with a sound sense of the T.P.O.” and “being able to enhance confidence internally as well as externally through clothing.”